

25

ペラグラ 第3報

—シェアクロッピング制度とその影響—

伊藤 泰広

トヨタ記念病院 脳神経内科

【背景・目的】 演者はこれまで、ペラグラの歴史と現代における課題を検証してきた。第1報ではペラグラ疾病史を概観し、現代でもペラグラは臨床像を変え存在することを、自験例を含め報告した。第2報では約1世紀前、アメリカ合衆国でペラグラの原因究明と治療法に生涯を捧げた Josef Goldberger を紹介した。今回は特に19世紀後半～20世紀前半、アメリカ合衆国南部で深刻だったペラグラ禍を社会的側面から検証する。

【方法】 文献に依った。

【結果】 主に英仏の移民で始まったアメリカ植民地において、南部州域ではプランテーションによる大規模農業経営が始まった。労働力は当初は白人の年季契約農だったが、慢性的不足から次第にアフリカ大陸から輸入した黒人奴隷を使用するようになった。18世紀に英国で始まった産業革命で綿織物産業がその中心的役割を担うようになると、プランテーションの主要作物も綿花に集中し、19世紀半ば、南部州はその6割を供給するに至る。南部州は綿花の最大の供給先として、英国を中心とした自由貿易圏に属することが理に適うため、自由貿易を望んだ。一方、北部州は急速な工業化の進展から、新たな流動的労働力を必要とし、奴隷制とは相容れなかった。また欧州より自国の工業製品の競争力を優位に保つため保護貿易を希求した。こうした経済的対立の結果、南部諸州は連邦から離脱し、連合国を宣言し、連邦からの離脱を認めない北部州との間で南北戦争（1861-1865）が勃発する。南北戦争は初の近代戦と言われ、南北共に多くの戦死者を出した上、北軍は兵力のみならず社会・経済活動を営む全てを根源的に破壊することで戦争継続能力を喪失させる「焦土作戦」を敢行し、全役蓄の1/3を殺戮し、農機具の半分を破壊するなど、南部州は大きな損害を被った。その結果、多くの中小農家が働き手や家具、財産を失い没落した。戦争に勝利した北部州（連邦）は、南北戦争の大義名分とした「奴隷解放」を戦後実行したが、その成果は不十分であった。奴隷は解放されても、多くは生活の糧に労働力を提供することでしか収入を得られず、戦争でも土地や財産を維持できた地主（プランター）たちと労働契約を結んだ。これが sharecropping（シェアクロッピング：分益小作）制度である。これは土地の賃料と貸農具、種などの代金を、農民が収穫物で地主に支払う制度で、1870年代には南部に定着した。だが地主は小作人に契約で綿花生産を強制するなど、小作人には隷属的の制度だった。さらに地主に加え、農村の商人からも生活用品を現物で前借し、綿花で債務を返済する crop lien（クロープ・リエン）制度が定着し、解放民は借金まみれとなり、より一層土地に縛られることになった。戦後、南部農業は戦前の市場喪失を回復すべく、ますます綿花生産へ傾斜する。綿花栽培の強制は80年代にはさらに徹底し、黒人ばかりか、白人貧農、新移民までがこの「債務奴隷制」に陥っていった。こうした貧農の食事が、俗に 3M [Meat（豚背の脂身）、Meal（コーンミール）、Molasses（糖蜜）] と呼ばれる、安価で栄養的に偏りのある食事であり、これがペラグラ大発生の温床となる。ペラグラが別名 sharecropper's plague（分益小作人の疫病）と言われるのは、この制度と、これが招いた貧困の悪循環の所以である。

【結語】 アメリカ合衆国南部でのペラグラの発生には、同国の産業、経済、社会の歴史の変遷と深く関わっている。